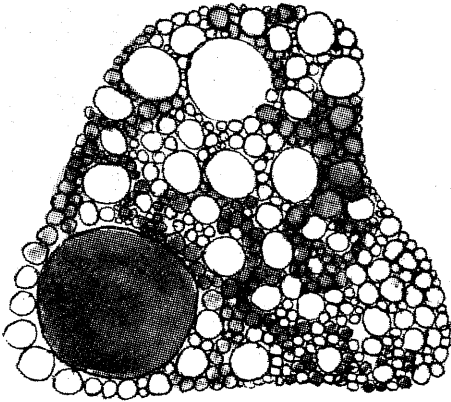


SF的読み解き
子どもという風景



第十一回 ウオッチング

堀内守

街を眺める

通勤する道。通い慣れた道。そこを歩くとき私たちの手足は軽い。特に気を惹くものもない。そう見えるのは「慣れ」ている証拠である。急いで行かなければならないときなどは、まったく時間に追われているから、あたりを眺めるゆとりもない。季節によってあたりの風景は変わる。本当は一日のうちでも何回となく変わっているのだが。

「忙しい」「忙しい」がアイサツになる。そのうちに、おかしなことだが、「お忙しいでしょうね」と言うのが相手を尊敬することになったりする。言われた方もまんざらではなさそうで、強く打ち消しながらも、にんまりとしている。これがサラリーマン社会の出現とともにあらわれた風景である。それ以前はそんなことはなかった。「忙しい」のは生活にあくせくしていることにはかならなかつた。「あくせく」とはいかにも体感的な表現である。

忙しがっているうちに、街を眺めることを忘れてしまった人がいる。ゴルフ場へはよく出かけるようだが、街の動きをついぞ眺めてみようとはしない。喫茶店などに悠々と陣取って、ウィンドウの外を行く人びとを眺めるなんて——「そんな暇はないよ」といったげである。

いま、大根一本がいくらぐらいだろう、なんて関心を喚起し、あちこちのお店を移動観測してみるのも、古書店をまわって、書棚の動きを眺めてみるのも、ウォッチングである。

いちばん勉強になるのが人の動きをウォッチすること。

「ナーンだ。そんなこと。毎日やってる」

と答える方は、まあ、そう顔をきつくせず。また「ばかばかしい」と忙しがる方は功利主義的にお考えにならずに、ちょっと街情報を手に入れるべきである。

同じことでも、「街情報」などと言い換えると身を乗り出す方もある。そう、そういう時代になった。名前が変わったというような単純な現象ではないだろう。こう言い換えることによって、視野が変わり、それまでぼんやりしていた映画がしだいにはっきりとしてきたからである。

街の動向と子ども

街の動向を知ることが重要である。

第一の理由は、産業構造がどんどん変化していることがわかってくるからである。大変化のまっ只中に身を置いてみると、通りであれ、街並みであれ、業種であれ、

そこを通っていく人びとであれ、みな情報の海のように
思えてくる。

この中に「子ども」を加入させてみよう。

彼らの敏感な感覚は、この「海」のなかをどう泳いで
いくだろうか。

第二の理由は、消費構造の変化である。何と、子ども
向けの商品の数や種類は一つの巨大な市場を形づくって
いる。玩具、衣服、文房具、食べ物、本。まことに大変
なものである。

本店さんの店頭にあるマイコンに群がっている子ども
たち。おもちゃ屋さんに並べてあるビデオ・ゲームに夢
中になっている子どもたち。自動販売機でジュースらし
きものを買って求めている子どもたち。

市場の多様化・細分化はみごとにここまで徹底してい
る。

第三の理由。道路は完全にクルマのものになった。ク
ルマで連れて行かれる子どもたちは、次の瞬間には歩行
者に変身する。その変身という現象は子どもだけのもの

ではない。

同一人が場面ごとにどう変身するか、これは眺めよう
とする意志、連続して眺めてみようとしないうかがり見え
てこないのである。

もし、そういう追跡をおこたらないならば、街のウォ
ッチングは、われわれの視野を変えていくだろう。

見られている

眺めているつもりなのが、逆に見られているというこ
ともある。それも敏感に感じとれる。

おたがいに視線を合わさないように気を遣っているお
となたちもいる。子どもたちのなかにもそういう気遣い
をしている者がかならずいる。

仲間同士でにぎやかにおしゃべりして歩いていく子ど
もたちはこんな気遣いをする必要はないから交わしてい
ることばもポンポンと弾ねている。そのことばの数々
は、現代の細分化した文化のありようをしみじみと考え
させてくれる。

隠語のようで、全然通じないこともある。情報が短期間通用し、あっという間に消費されていく。一つの珍語が新鮮さを競うのは約二週間。二週間で消えていく。かくて、流行に遅れまいとして、みな苛々し出す。

街をひたすら散歩よろしく探索するとこんな風景が見えてくる。擬視とか聞き耳を立てるのに似ていよう。もっとも、近ごろでは聞き耳を立てなくとも、あちらから勝手に会話がとび込んでくる。だれも声高に語るのを恥と思わなくなったのである。子どもたちの会話もカン高くなり、よく聴くと、「会話」というにはほど遠い。ホントは一人一人が勝手にしゃべっている。モノローグに近い。独言に近い。あんなにコトバを消費しながら、実際には空しさの味が浮かびあがったりして。

場所と時間をきめておいて、道行く人びとのファッションや街の様子をウォッチするのも一つの手である。定期観測に似ているが、ただ立っているだけでは芸がない。積極的に取材してみるのもよろしかろう。メモ、スケッチ、いろいろなやり方があるが、子どもを観察す

るにはスケッチ・ブックを帯同するのがいちばんである。スケッチ・ブックはスケッチ用とはかぎらない。メモも取れるし、整理も容易である。子どもがこわがらないのがあるがたい。場合によると、のぞき込んできて、こちらの取材に応じてくれたりもする。

一つの街だけでは不十分である。いくつかの遠く離れた街の空間的な比較も結構役に立つ。われわれの頭のかなにできあがっているAという街のイメージとBという街のイメージは、こうすることによってどんとんと修正されていく。世間の人がAという街についてaというイメージをもっているとする。ところが、それはAという街の何十年も昔のイメージをもとにつくられたもので、いまではaというイメージはむしろBの方に近づいているなどということもわかってくる。

子どもが似てきた。どこの街をとってみても。こんなぐあいに「一般理論」がわかってくる。いや、「画一化」というべきだろうか。

看板、宣言、宣伝、商品も似てきた。異口同音に同じ

ことが叫ばれている。「交通事故をゼロにしよう」「地方の時代」「青少年健全育成の町」などなど。

子どもが似てきた。

男の子は自分のことを「ボク」と称する。女の子は自分のことを「ワタシ」と称する。それが日本中どの学校でも見られるようになった。が、休み時間ともなればオレの乱舞。街路を歩いている子どもたちが口を開き加減にして歩いている。これも全国的に見られるようになった。口を「への字」にきつと、結んでいるような子はいない。長い髪を手でしきりにかきあげている女の子もふえた。あのしぐさはOLのしぐさと一致する。

昔の子どもが観念の上で世界の話事来歴に通じたり、最新型の機械の名をおぼえて得意になっているように、いまの子どもたちも観念の組み合わせをバネにして、いまここにはない世界に飛翔していく。マンションに住む子は、隣りの高層住宅がアピタシオンだとか、キャッスルであるとか知っても驚きはしない。むしろ、椅子の生活が当たり前になった彼らは、畳に手をついておじぎをす

ることを経験する機会がなくなった。こんなことを並べていくとキリはないが、一つの時代の変化は、われわれの習慣から知覚の構造までを変えてしまったのである。

ケレイとキタナイ

たとえば、こういうウォッチングから得られる成果は「ケレイ」だとか「キタナイ」というようなありふれたことばがどういう文脈で使われているか、さぐれるところにある。「ケレイ」と「キタナイ」とはいろいろな意味で使われている。ちょっと常識で考えただけでも、「ケレイ」は、美しいとか、清潔だとかというように文脈が分れていく。

こんな平凡なことばでも、ある文脈においてはまったく変貌してあらわれてくる。特に人間関係を表現する喩として用いられた場合にはササマジイ。「キタナイやり方だ」という評価、「ケレイ好きなふりをする」などは、文字面ではうかがい知れぬ世界の所在を示しはじめ。

ちょうのように

子どもたちのあいだで激しく交わされている会話を聴き入っていると、思いがけぬ妄想にとらわれてしまう。

これは、この子やあの子というように特定できる者たちが会話をしているのではなくて、これまで人類が開発してきた共有財産である言語を子どもたちがつぎつぎと新しく組み合わせ、言語ゲームを楽しんでいるように思えてくるのである。

ことばの方が主人公で、子どもたちはむしろ、ことばによってしゃべらされているのではなからうか。あるいは、子どもたちは花粉を運び、花から花へと渡り歩く、ふうのように、ことばの花園を飛びまわっているのかも、
しれない、と。

「あ、キレイなハナ」

「ああ、キレイなハナ」

「え、キレイなハナ？」

「ま、キレイなハナ」

「ボクがまっ先に見つけたんだぞ」

「いや、ワタシだよ」

「ボクだったらサ」

「フン。なら、キタナイよ、あんなハナ」

「じゃ、見るなよ」

「ウン、見てやらないよ。キレイじゃないもん」

「ハナ」はたまたま彼らの口を開かせたにすぎない。そこで交わされている会話は、むしろこの二人の、それぞれの「自我」を表出し、合わせてそれぞれの「レトリック」を表現している。小学生であれ、中学生であれ、どんな形でことばを学んでいくのである。いいかえると、ある場面において、ある状況において、つき放したり、近づけたりして、指示し、組み直し、命名し、頭をはたらかせながら。

これは明らかにゲームと構造を同じくする。花が「キレイ」であるか否かはさし当たっては死活問題ではない。どちらが先に見つけようがかまわないのである。なのにそのことをあたかも死活にかかわる「重大」問題で

あるかのように語り合う。

高感度人間

たまたまひとりでその花に出会ったとしよう。そうすると、「あ、キレイなハナ」というのは、他人に伝えようとする目的で発したのではなく、自分に向けて、自分で自分に確認するのが目的である。「キレイなハナがそこにある」ということと、それを見つけた自分の双方を自分に伝えようとしているわけである。

相手がいた。

状況が変わった。もし相手が何も言わないでつつ立っていたなら、文脈はまったく変わっていくだろう。「見えないの？」というように。あるいは「どこに？」と向うからたずねたかもしれない。いずれにしても、何らかの反応は示すだろう。

「いいお天気ですね」という語りかけはインターナショナルに用いられている。知らない人と交わす最初のことばとして、この表現は実に効果的である。お天気の話、

それは天気について語っているようでいて、実のところ、語りかけた側が自分は警戒しなくてもよい人間だ、安心してくれ、という意志を伝えている。これなどはウォッチングの初歩的な例というべきだが、さりとて安易な例と見なすことはできないだろう。

もし、こう言ったからといって、相手側がこちらの意図を理解できなかったらどうなるか。人見知りをおぼえた子どもに向かって何か語りかけた場合のように、こちらの意に反して、わっと泣きわめくかもしれない。そうなれば、こちらがいくら警戒しなくてもいいと強調してもアトのマツリだろう。

街にはこんな場面もいっぱいあるのだ。

音・リズム・意味

騒音もある。音楽もある。どこからどこまでが音楽で、どこから騒音というべきか。境界線はきまらない。ある人びとにとっては音楽であるはずのものが、他の人びとにとっては騒音としてしか感じとれぬことも充分起

こりうる。

感覚遮断という実験がある。人を音も色も匂いもない装置に閉じこめるといふ実験だ。静かなところに行きたいと日頃からねがっている人でも、この実験を受けること、完全な静けさがいかに耐えがたいかを身をもって知ることになる。さりとて、逆の極端な場合はわれわれの身体のリズムが狂ってしまうのである。

音の意味も相対的なものである。子どもはあるていどの騒音がないとかえって落ち着きをなくす。いろいろな音を聴き分けるのも彼らの生活情報の基礎をなす。

それはまるで俳諧歳時記のように子どもたちの日常生活の中にあらわれる。ストックされていることは、何かのきっかけで組み合わさり、とび出してくる。

「あ、キレイなハナ」

こんなに短かい表現でも、しかるべく整理し直してみると、大変高度な学習の所産であると考えざるをえない。

「あ、キレイ、そのハナ」

「あ、そのハナはキレイ」

「あ、キレイだ。そのハナは」

「あ、キレイなこと。そのハナったら」

主体の位置と情が「ハナ」という指示対象といっしょに表出されてくる。「そこにキレイなハナである」という「報」に「情」が加わって、はじめて「情報」となるのである。

「ハナ」ばかりではない。ほかにもいろいろなものがあったろう。それなのに、とりわけ「ハナ」だけが浮かびあがった。なぜだろう。実はそこには一つの秩序がはたらいっている。わけのわからぬ混沌としたものは情でもないし、「報」でもないだろう。「情」と「報」が結びつくことによって、まわりの状況は一つのまとまりをもったものとして形づくられるのである。

異形なもの

もしも街を行く人びとのだれもが一言も発せず、街の騒音が何も聞こえてこない状態が現出したとしよう。無

声映画のように。そうしたら、静かさ、静寂さよりも不気味さが感じとれる。

そういうことは現実にはない。あり余った精神の余剰は、街行く人びとのしぐさ、表情、歩き方にいたるまでニュアンスやアクセントを与えている。幼児から青年、青年から壮年、はたまた高齢者にいたるまで、独得のポーズやポジションを見せてくれる。

これらをのっぺらぼうなものとして一様なことはで括ってはいけない。「大衆」「市民」「庶民」等はあまりにも大味過ぎる。

ニュー・メディア時代といわれ、ニュー・メディアがじわじわと浸透しはじめている。それを一つの例にとってみれば、これにもっとも柔軟にとびつくのは子どもたちであろう。サラリーマンが社命で研修に出かけ、苦勞して修得すべきものと思ひ、ニュー・メディアを異形のもの扱いするのに対し、子どもたちにとってはニュー・メディアは遊び仲間の一つにすぎない。街をウォッチングすることは、こういう動きをキャッチするよい機会な

のである。

系統的な学習といえば、多くの人が階段のイメージを思い浮かべるらしい。一段、一段を順序よくのぼっていくというのがそれらしい。しかし、道ははたして一つだけなのか。階段を二段とびにとびあがってもよいではないか。あるいは、階段イメージが修正され、別の異形なものに変化するのも悪くはないのである。

エスカレーターに乗る。子どもの多くはじっと立ってはいない。かならずエスカレーターの上をかけのぼりたがる。仲間といっしょであるときはこれが一段と活発になる。お調子に乗るのである。ではなぜそんなことが起こるのか。

いくつかの仮説を立ててみよう。そして、丹念に街中をウォッチングよろしく歩きまわって見る。お調子に乗る。呼び合う。呼応する。ささやき合っている。ざわめいている。ふざけ合っている。じゃれ合っている。

これらの全部がコミュニケーションとしてあらわれてくる。特定の目的に限定されないコミュニケーション。

コミュニケーションすることだけが目的のコミュニケーションだ。

仲間の悪口を言い合っているときの子どもたちの何と生き生きしていることか。ムラではこうはいかない。だが聞き耳を立てているかわからないからだ。密告のない世界で散々に悪口を言い合ってさっぱりした面もちで帰ってくる子どもたち——。このコミュニケーションには「現在」以外の活路は出現しない。「十年後」とか「三年前」というような時間枠は論外なのである。まさに「いまのいま」を生きている。

「だいたいオトナたちがいけないのだ」と力んでいる少年少女の面もちを見よ。この風景は何十年前にも見られた。何十年もの前の少年少女たちは、いまは「オトナ」になって、あのときはすっかり忘れているのかもしれないが、街をウォッチしてみると、「オトナ」という表現がしだいに輪郭を失なって、「コドモ」と溶け合ってしまう。街は「コドナ」にあふれている。

(名古屋大学)

